

# 男装官吏と花散る後宮

仮面の貴人と妃の秘密

春日あざみ Kasuga Azami



アルファポリス文庫

「芙蓉様は闊達とした気持ちのいい方でございました。我々のような者にも分け隔てなく接してください……それなのに……」

薄桃の襦に、紅色の裙を胸元で結んだ三十路ごろの侍女は、悲しげに目元を伏せた。涙を堪えるためか、肩から下げた臙脂の帔を両手で掴んでいる。

「悪霊に取り殺されるだなんて」

目を細め、羅刹は侍女の表情を注意深く眺めた。

「お辛い中、お時間をいただき感謝いたします。妃の姿をした幽霊が現れ始めた日に遡り、芙蓉妃の様子についてお聞かせいただけますか」

慣れない薄鼠色の宦官服は羅刹には大きい。間に合わせに貸し出されたものに文句は言えないが、裾をちよんどのいい丈にするため、腹まわりの布があまりすぎているのが気に掛かる。語り始めた侍女の言葉に耳を傾けつつ、卓の下で帯周りの布がよれて

### プロローグ

いないか確かめた。

——本当なら今頃は吏部<sup>りぶ</sup>で仕事をしているはずなのに。額に皺<sup>しわ</sup>を寄せ、隣に座る男を睨<sup>にら</sup>む。不気味に笑う女の大頭面<sup>だいとうめん</sup>。恰幅<sup>かつぶく</sup>のいい体には不似合いな深い緑色の女官服。変装のつもりらしいが目立って仕方がない。

この男に正体<sup>せいだい</sup>を知られなければ、こんな面倒なことをせずに済んだものを。

——仕事が終わったたら、史書を読もう。このやるせない気持ちに興味に没頭して霧散させたい。

歴史の海に身を沈める癒しの時間を想像し、羅利は恍惚<sup>こうこう</sup>とした表情を浮かべるが、侍女の啜り泣きで現実へと引き戻される。

「まさか後宮の悪霊妃祓<sup>はら</sup>いに利用される羽目になるとはねえ」

ぼやく羅利のひとり言は、侍女の嗚咽<sup>おえん</sup>にかき消された。

## 一、仮面の貴人

日出る国と名高き大国、禹<sup>う</sup>国の龍煌城<sup>りゅうかうじょう</sup>。過去の名匠の手によるとされる、まるで生きているかのごとき鳳凰<sup>ほうおう</sup>の彫刻に彩られた殿には、真新しい官服を着た官吏<sup>かみ</sup>たちが並ぶ。家柄や出自にかかわらず、優秀な人材を選抜する官僚登用試験<sup>かきま</sup>、科挙<sup>かきま</sup>。この場に集まっているのは、超難関と言われる科挙をくぐりぬけた禹国の精鋭たちである。

「状元<sup>じゅうげん</sup>及第<sup>りつだい</sup>、柳羅利。前へ」

「はいっ」

小柄な青年が皇帝の前に進んでいく。色素の薄い茶の瞳に黒い頭髮。他の新人官吏と同じように、長い髪を頭上でまとめており、幘頭<sup>はくとう</sup>を被<sup>かぶ</sup>っている。淡青色の官服を着てはいるものの、華奢<sup>きゃしゃ</sup>でどこか頼りない。

「科挙の平均及第年齢<sup>かきま</sup>って三十そこそこののに。あいつ十九歳<sup>じゅうじゅうさい</sup>だよ」

「あれが第一等の成績をおさめただなんて信じられん。どこの家が背後<sup>かたもと</sup>についているんだ」

「いや、なんの後ろ盾もない平民らしいぞ。しかも孤児の」

厳肅な空気の中、羅利は皇帝から賜った任命書を握り締め、もといた位置へ戻る。そしてしばらくすると彼は小刻みに震え始めた。

「ふふ、ふふふ……」

不気味な笑い声に周囲の視線が自然と集まる。

「おまけに気味の悪い奴だな」

「まあ、上位及第者の状元、榜眼、探花は、毎年奇人変人らしいし」

ヒソヒソと噂する周りの目などお構いなし。彼はくつくつと笑い続ける。

——老師、やりましたよ。通史編纂への第一歩をようやく踏み出しました。

物心つくかつかぬかの年頃、羅利は紙屋に働き手として貰われた。大きくなるうちに気づいたことだが、「養女」とは名ばかりの奴隷である。子であれば日銭はいらず、最低限の食事だけさせて働かせればいい。賢いやり方だとは思うが、幼子当人にとっては悲劇である。日中は紙漉きや牛馬の世話でくたくたになるまで働いた。

厳しい生活を送っていた羅利だったが、唯一の楽しみがあった。

『紙屋の娘つ子。まあ来たのか、本の虫め』

『いいじゃないですか。どうせ瑛老師暇なんだし』

『俺あこう見えて忙しいんだよ』

『またまたあ』

養父は邑の元締めを務めており、地域の老人の面倒も見ていた。実際に世話をするのはもっぱら羅利であったが。その世話の一環で出会ったのが瑛だ。

瑛は、元は宮廷に勤める史官で、歴史学者だったという。彼は宮廷の歴史に始まり、禹国中の郷土史や民話、そして西方や東方の国々のことにも明るかった。そんな身分のものがどうして辺境の邑にいたかといえは、利き腕を失ったせいで美しい字が書けなくなり、官職を追われたのだという。

これもまた瑛本人にとつては悲劇だっただろうが、そのおかげで羅利はよき師に出会えた。

『さあ、早くこの前の続きを聞かせてくださいよ！』

粗末な薄縁の上に腰を下ろし、膝を抱えて今か今かと瑛の話を守つ。すると彼は立派な顎ひげを触りつつ、もったいぶった調子で羅利に向かって話し始める。

『——かつてこの地が混沌にあったころ、小さな邑に龍煌というよき領主がいた。天は龍煌の清廉さに感銘を受け、鳳凰を彼の従者として遣わした。龍煌は鳳凰の力を借

りて民をよく導き、争いばかりであった大陸に安寧あんねいをもたらし、禹国の礎いしずえを作りあげた』

『建国神話はもう聞きました。ボケちゃったんですか、老師』

『おい、ひでえな。そんなふうにするなら、もうお前には話してやらん!』

『わあ、そんな。謝りますから、続きを聞かせてくださいよ』

狭い世界で窮屈きうくつに暮らす羅利にとつて、瑛老師の話は極上の娯楽だった。

すっかり歴史の虜とりになった羅利は、ある日運命を変える知らせに出会う。紙を仕入れに来た宮廷の官吏から、禹国の歴史をまとめる通史編纂事業が立ち上がるという話を聞いたのだ。

「養父に科挙を受けたいと言った時は大目玉をくらったなあ。もはや懐かしい思い出だ」

子ども時代の思い出を振り返りながら、羅利はうんうんとひとり頷く。

女は科挙を受験できないのだから当たり前である。おまけに羅利は貴重な労働力。

養父が手放すはずがない。だが思い込んだらまっしぐら、猪突猛進ちとせうもうしんな羅利がそれで諦めるはずもなく。断られたその日の晩、人目を盗んでこっそり家を抜け出した。行き

先はもちろん老師のところである。

『どうしても、どうしても通史の仕事がしたいんです。女でも官になる道はないのでしょうか』

必死の形相でそう懇願する羅利は当時八歳。老師は「突拍子もねえことを言うやつだ」と笑ったが、翌日また羅利が訪れると、大量の本の山を用意して待っていてくれた。

『官吏の入職時に服を脱いでの身体検査なんぞない。天子を欺あそむいてでも希望の仕事に就きたいって気概があるなら、男を騙かたって試験を受けろ』

老師の言葉に羅利は驚いた。ずいぶんと大胆なことを言う。女として通史に関わる道はない、だから皇帝を欺けと言つてのけたのだ。普通なら尻込むところだろうが、羅利は違った。

『やります』

ためらいなき答えに、師ははじめ面食らった。おおかたそう言えば怖気おそしけづくと思つていたのだろう。だが羅利の言葉に偽りなしと判断した師は、真面目な顔をする。

『大志を抱くことはいいいことだ。だが科挙は厳しいぞ。やる気があるなら付き合つてやる』

老師の背に後光が差して見えたのは言うまでもない。

それから寝る間も惜しんで勉強を重ねた。苦戦すると思われたが、生まれついた才があったのか、はたまた老師の教え方がよかったのか、知識はあれよあれよという間に身につけていく。これは勝機ありと判断した師により、十代のうちの受験を勧められ、紙屋から出奔した。官吏時代の人脈を使い、師が手配してくれた下宿先に無事辿りついた羅利は、及第まで何年もの年月を費やすという科挙への挑戦を始めたのだ。

『状元及第 柳羅利』

任命書に書かれたこの名前は老師がつけてくれたもの。紙屋でつけられた奴隷としての名は捨てた。これがもう、自分にとって唯一の名である。

『戦で矢に射抜かれて死ぬかもしれないが人生だ。やりたいことがあるなら、思い切りやってこい。お前には才がある。きつと夢を叶えることができるだろう』

片方の口角だけを上げ、格好つけて笑う老師の顔が、頭の中に浮かんで弾ける。

「まずは官吏としてしっかり能力を示さなきゃ。史官になるには推薦が必要だし」

新人官吏は進士と呼ばれ、仮配属の部署で一年を過ごす。その後正式な辞令を受けて本配属となるのだ。それまでに優秀さをしっかりと示さねば、配属の希望は通ら

ない。

ぶつぶつひとりごとを言っているうちに最後の進士が呼ばれ、間も無く進士式も終わりを迎えようとしている。

「進士の諸君。禹国の繁栄のため力を尽くすがよい」

皇帝の声が響き渡る。その場にいる他の進士と同じく、羅利は左膝を床につき、顔の前で手を合わせて首を垂れた。

これはまだ始まりに過ぎない。夢のため、女であることを隠し通し、どんなことでもやり遂げてみせよう。そう気を引き締めたはずだったのだが。

どうやら羅利の覚悟は、足りなかったらしい。



芍薬の咲き乱れる皐月。希望に満ち溢れた進士式からひと月が経ち、書類の束を抱えた羅利は皇城を歩き回っていた。

「ええっと、次は工部……ってええ！ 嘘お、こんなに遠いのお……」

禹国の首都・燦に作られた龍煌城は、大陸において最も進んだ城郭都市である。堅

牢な城壁に守られた内部には民の住む外郭、官吏の働く官庁街の皇城と、皇帝や妃の住まいがある宮城がある。皇城だけでも西端から東端まで六里（三キロ）ほどあり、三省六部を巡るとあれば足は棒になる。結果、書類配りなどの雑務はもっぱら進士の仕事だ。

額に滲む玉のような汗を手ぬぐいでふきながら、上官が描いてくれた地図を確認する。正午までにはこの束を配り終えねばならないが、すでに日は南中に近くなっていた。

「吏部です、あの……」

「確認しておく！」

工部に到着して早々、中年の官吏に書類をひつたくられる。男は新しい銅鏡の製作について若い官吏に指示しながら、羅刹の持ってきた書類を斜め読みしている。

疲れもあり、ムツとした羅刹は「ちゃんとお礼くらい言いなさいよ」と心の中で毒づきながら、中年官吏の背中に向かい、顎を突き出し威嚇してみせた。

「まだ何かあるのか？」

「いえ、何もアリマセン」

間が悪く振り返られ、しゃくれ顔でそう返した羅刹は、逃げるように工部を飛び

出す。

「しまったしまった。しっかし新作の銅鏡って……。青銅器職人を囲い込んでそんなことする暇があるなら、もう少し治水のことを考えるべきでしょうが」

今年は大雨が続き、各地で川の氾濫が多発していると聞く。土木事業も管轄する工部には、工芸品に力を入れるより、もっと実害のあるものに目を向けてほしい。

「さて、残るのは御史台か」

官吏の働きを監察する監察御史、そして羅刹が目指す政務記録官の史官がいる部署だ。通史編纂事業は史官の仕事で、精鋭のみが関われる。

羅刹は片手で袍の襟を引き上げ、喉元が隠れていることを確認した。

憧れであると同時に、絶対に女であることを悟られてはいけぬ部署である。うっかり監察御史に気取られたが最後、帝を欺いた罪で牢獄行きだ。

「こつちだな」

手に持っていた地図を懐にしまい、目的地に向かおうと前を向いた——その時。

ばしゃん。

脳天からかけられた生ぬるい液体で、髪が濡れる。

初めは何が起こったのかわからず、鴉に糞でも落とされたのかと思ったが。

鼻をつく墨の匂いと視界にかかる黒い雨垂れ、そして襟元に滲む色を見て、墨壺すみつぼの  
 中身をかけられたのだと気づいた。

羅利はぐいと口元を引き締め、先ほど汗をぬぐった手ぬぐいで顔の墨を拭き上げた。  
 「貴様、礼儀を欠くのも程々にしろ！」

見上げたそのさき立っていたのは、額に青筋を立て、こちらを睨みつける強面こわもての  
 男。淡青色の官服ということは、羅利と同じ進士のようだ。

「礼儀を欠く相手に墨をかけるのが貴方の流儀ですか？」

この忙しい時に何をしてくれる。思いつく限りの罵詈雑言ばりぞうごんを吐いてやりたい気持ち  
 を堪えつつ、羅利は冷静に問うた。咄嗟とつさに書類を袖の下に庇はつてよかった。官服が傘  
 となつたおかげで、汚れずに済んでいる。

「やめる舊信わいしん、つかかかるとだけ時間の無駄だ」

強面男の隣に立つ、短い銀髪に狐顔の進士。歳は羅利よりも少し上だろうか。口  
 ではとがめるようなことを言っているが、目は笑っている。

「しかし漢林様！ 李り李家のご子息を一度ならず二度までも無視するなど。もう我慢  
 なりません」

どうやら見てくれとは違い、ゴツい舊信より細身の漢林の方が立場は上らしい。良

家のご子息と腰巾着こしきんちやくといったところか。

——やることがくだらないな。っていうか李李家って。何人も大將軍を輩出した名  
 門中の名門だよ。文官を志した息子がいたなんて。

必要とあらば媚こびを売るべき場面もあるだろうと思ひ、有名どころの家については調  
 査済みだったのだが、彼については把握していなかった。

羅利は無表情のまま、漢林の方へ顔を向ける。

「悪いけど、君のことなんて知らなかったし。赤の他人に挨拶をしないことを、無視  
 とは言わないのではないかな」

気に入らない相手に墨をぶっかけ、溜飲りゅういんが下がったのであれば、さっさと解放し  
 て欲しい。太陽の位置を見るに、正午までもう半刻しかない。彼らと話している時間  
 が惜しかった。

「……お前、本当に失礼なやつだな」

狐顔の嘲笑が止まり、真顔に変わる。舊信は噴火前の火山のごとき有様だ。

「平民など普段口を聞く機会さえもない漢林様が、ただ隣にいたというだけで、自ら声  
 をかけてくださったというのに、なんたる口の利き方」

舊信の言葉に、羅利は片眉をあげる。

「自ら声をかけてくださった？ いつの話？ 記憶にないのだけど」

は、と馬鹿にするように笑った漢林が、汚物でも見るような目を羅刹に向ける。「進士式での出来事をもう忘れてしまったのか。羨びた鶏しよのようなのは体だけにしておけ」

そうは言われても、あの時は浮かれていて周りなど見ていなかった。だが隣ということば。

「もしかして、進士式の時僕の隣の席にいた人？ ああ、榜眼か」

「貴様……！」

漢林の顔がカッと朱に染まる。どうやら今の発言を侮辱と取られたらしい。

どうやらこの人は、ぼっちの自分に声をかけてくれたようだ。孤児の自分と良家の直系、その身分差を考えれば、話しかけられて無視をしていたのなら無礼なのは間違いない。だとしても、墨を頭からかけるのはやりすぎだと思いが。

「そうか、ぜんぜん気がつかなかったよ。せっかくの厚意を無駄にしてごめんね？」  
極力申し訳なさそうに言ったつもりだったが、多少嫌味ったらしくなってしまったのはご愛嬌あいぎょうである。こちらは大切な官服を汚されているのだから。

瞬間、漢林に乱暴に襟元を掴まれ、拳を振りかぶられる。

——やば、怒らせちゃった。仕方ない、殴られておくか。時間もないし。

痛みを覚悟し、咄嗟に目を瞑ったのだが。がつん、という音がしたというのに痛みがない。

それに拳が当たったにしては軽い音だったように思う。不思議に思い、うつすら目を開けてみれば。焦点を結んだ先には、拳を振り上げたまま泉氣あつけに取られた顔の漢林の姿。そしてお互い状況がわからぬまま見つめ合ううち、彼の眉間みげんがどんどん赤みを帯び、小さな傷口から血が垂れ始める。

「こんのっ……、貴様なにをした！」

ふと、漢林の足元に扇が落ちていっているのに気がつく。どうやらこれが彼の眉間に当たったらしい。拾い上げてみたところで、扇の要かなめに施された龍の意匠に気づく。

「これ……：皇家の紋章じゃあ」

皇家、という言葉に、漢林たちはぎくりとする。

羅刹は周りを見渡したが、扇の主は見当たらない。

こんなやんごとなきものを持てるのは、皇家ゆかりの人間しかいない。そして扇の持ち主が漢林を狙ったということは、羅刹に加勢してくれたと考えると間違いはないだろう。

「……奮信、仕事に戻るぞ」

「は、はい！」

分が悪くなった二人は尻尾を巻いて逃げていく。遠ざかっていく負け犬たちの背を羅刹は見送り、やれやれ、と息をついた。

「さて」

しばし待ってみたが、扇の主が出てくる気配はない。丁重にお礼を述べねばならないと思っただが。

「っていか書類届けないと。あーあ、時間ないのに。この汚れで御史台はまずいよね……」

身だしなみには仕事の出来が出ると、進士の教育を担当する礼部から口酸っぱく言われている。つまりこのまま御史台に行くのは、自分の官吏としての出来の悪さを晒しにくようなものだ。

「この辺はあんまり来ないから、どこが安全に着替えられる場所かわからないな」

科挙の第一等通過者である状元に対してやっかみを持つものは多く、こうした嫌がらせは少なくない。そのため槍が降ろうと泥が降ろうとすぐさま身なりを整えられるよう、官服の中には着替え一式から刃物、裁縫道具もろもろ仕込んである。

扇を一旦胸元にしよう。周囲を探し歩いてみて、外廊下に面した庭園に目が止まった。燕子花が群をなして咲く池の辺り、柳の木がいい具合に影をおとしている。

この時間、官吏は忙しく働いている。わざわざ草花をかき分けあんなところまで行くものはいないだろう。下手に建物の中で着替えるよりよっぽど安全なはずだ。

左右から人が来ないのを確認し、外廊下から庭園へ出る。目的の柳まで移動すると、人通りのある側から死角になる場所を見つけた。

やはり人気はない。というかむしろ、人ではない何かが出そうな不気味さのある場所だ。

——さっさと済ましてしまおう。

羅刹は手早く汚れた官服を脱ぎ、キツく巻いておいたさらしの下から新しい官服一式を取り出し、予備の袍を羽織ったその時だった。

「お前……」

背後から聞こえたのは、男の声。羅刹は、さあっと全身の血の気が引くのを感じた。「もしや、女か……？」

慌てて袍の上に官服を着る。人がいないのは確認した。ここには誰もいないはず。と、いうことは。肌は粟立ち、体はガタガタと震え始める。だがこのままじっとして

いるわけにもいかない。

油が切れたカラクリのごとく振り返れば――

「わああああああ！」

羅刹の背後、立っていたのは雅やかな青紫の胡服を着た男。施された刺繍の豪華さから、豪商か、はたまた高貴な家の出か、とにかく金持ちなのは間違いないだろう。肩幅が広く背丈も羅刹より頭三つほど高い。

だが異様なのは顔だ。大頭面という、大道芸で使う張り子の面をかぶっている。しかも口が裂けたように笑う熊猫の面ときた。首以下と頭部の方向性がちぐはぐなものも程がある。

――奇人、これは間違いない奇人。いや、そもそもこれ人なんですか？

羅刹は目の前に立つ理解の範疇を超えた存在に慄いていた。

「質問に答えろ。女なのかと聞いている」

くりかえされた質問に、動揺から忘れていた危機感が戻ってくる。

「僕は男です」

きり、いつもの優秀な官吏の顔に切り替える。胸を見られたといっても一瞬のはず。サラシは巻いていたし、じっくり見なければ潰れた胸の膨らみなどわかるはずも

ない。

――バレルわけにはいかない。ようやく勝ち取った夢への一步を、出仕一ヶ月で潰すものか。

「こんな場所で着替えていたことについてはお詫びします。官吏としての品位を欠く行為でした。ですがのつびきならない事情がありまして……」

熊猫面の男は、羅刹の言葉を聞いているのかいないのか、一直線にこちらへ歩いてくる。冷や汗をかきながら、言い訳を並べつつ、官服の襟元をしっかりと両手で合わせていたのだが。

べり。

「ぎゃあああああ！」

「……やはり」

間近に迫った熊猫野郎が、突如羅刹の両手を払い、官服の襟を暴いていた。

「なにをするんですかあああ！」

ひったくるように開かれた襟を締め直し、背後に下がろうとしたのだが。

「そのキンキン声はやめろ。鼓膜が破れそうだ」

今度は右手首をしっかりと掴まれ、動きを封じられる。振り解こうとしても、男の

手は力強くびくともしない。

——どうしよう、逃げられない。

こめかみを冷や汗が伝う。

高貴な人間にとって、庶民の人生など紙のように軽く取るに足らないものだろう。

李漢林たちの行動がそれを物語っている。この熊猫も、性別を偽って不相応な名譽を得た庶民の女を許すはずがない。きつと面白い暇つぶしだとばかりに嬉々として御史台に連行するはずだ。

終わつた。何年もかけてここまで頑張ってきたことが、これですべて無に帰してしまふ。

そう考えれば、無意識に瞳からは涙が溢れ、嗚咽が漏れる。

すると男は——なぜかわかりやすく動揺し始めた。

「な、なぜ泣く！」

はらはらと溢れ続ける涙を左手の甲で拭えば、熊猫はますます狼狽え、羅利から手を離れた。その瞬間、羅利は我に帰り、大柄な熊猫の脇の下に素早く潜りこむと、人のいる方へと脱兎のごとく駆け出した。

「あ、おい！ 待て！」

大事な書類を顎で挟み、走りながら官服の乱れを直した。

——進士式にはほほすべての官吏が出席していたはず。あんな妙な人物は記憶にない。

官でないとなれば、自分の名前は知らないだろう。髪型や眉の形を変えれば、ある程度人相は変えられる。今逃げきれさえすれば、ふたたび遭遇したとして気づかれる可能性は低い。

全力疾走しながら振り返って背後を窺う。一步出遅れた熊猫男だが、身長が高い分歩幅が長く、着々と距離は詰められていた。迫り来る恐怖の面から逃れるべく、羅利は宮廷の中を縫うように走っていく。

半泣きで逃げる小柄な官吏と、服だけは立派な熊猫面の不審者。この日目撃された二人の姿が、のちに宮廷七不思議として語り継がれることになるのはまた別の話である。

「吏部です、書類をお届けにありがとうございました！ こちらに置いていきます！」

なんとか熊猫をまき、御史台に到着した羅利は、書類を文机にたたきつける。人相の悪い監察御史が不快そうに顔を歪めたが、今日だけは乱雑な書類の扱いを許してほしい。どうか僕のことを忘れて下さい、そう願いながら御史台のある殿を出た。

「お、終わった……」

息も絶え絶え、顔からは汗が噴き出し、官服はぐっしりと濡ぬれている。

やり終えた。同期の嫌がらせにも負けず、柳のうしろから出現した不審な熊猫男にも負けず、午前の仕事を完遂したので。

両手を天に向かつて突き出し、背筋を伸ばす。苦勞した分、すっかり気分は晴れやかだ。

「さあ、昼餉ひるごは手早く済ませて、午後も仕事にうちこむぞ！」

むん、と気合を入れ、吏部のある瑠璃殿るりでんに戻ろうというところだったのだが。

「逃げられると思うな」

振り返る間もなく、ばさり、と頭から麻布あさみのを被せられ、手際よく布の上からぐるぐると紐ひものようなものを巻かれる。

「少々揺れるかもしれないが、許せ」

低音の美声がそう言った直後、羅刹は肩口に背負われた。

「ちょっと離してください！ あなた、さっきの熊猫ですよね？」

黙って連れていかれるわけにはいかないと、羅刹は陸おかに打ち上げられた魚のごとく暴れる。

先ほども思ったのだが、奇人のくせにいい声をしているのだ。自分を抱えている相手は、あいつで間違いない。声を聞いて羅刹は確信した。

「あばれるな、運びにくい」

「人を荷物のように運ばないでください！」

見失ってからもずっと羅刹を捜していたのだろうか。お貴族様はどうやら本当に暇を持って余しているらしい。

暴れても体力の無駄だと判断した羅刹は、外の様子を窺うことに神経を集中させる。連れていかれた先の目星がつけば、逃げる算段もつけやすいというもの。だが、この熊猫はこれまで羅刹が見聞きしたことのないような場所を通っているらしく、どこを移動しているのか見当がつかない。

野外を歩いていた時は三省六部のどこかかと思ったが、階段を降りた先、沈香しんかうの貴重な香りが鼻をくすぐった。そのうち人の声が遠ざかって、滴したたる水が石を打つような音が聞こえる。薄暗く湿気に満ちた場所を通っているようだ。

——まさか、いきなり牢屋にぶち込むつもり？

警戒して身をすくめたが、熊猫はまた階段を上がり始めた。今度は爽やかな金木屋きんむせの香りがする。

どこに連れていく気なのだろう。ようやく床に下ろされると、縄と布が取り払われ、羅利は眩しさに目を細めた。

「やっぱり熊猫男……！」

「俺には雲風という名がある。熊猫ではない」

「いやでもその被り物」

「これは、その……」

雲風は仮面に手を当てると、動きを止めた。他人に言うのが憚られるような深い事情でもあるのだろうか。沈黙に耐え、羅利は彼の返答を待つ。

「て、照れ隠しだ！」

「照れ隠し……?」

いいことを思いついた！と言わんばかりに勢いよく発されたその言葉に、羅利は啞然とする。

なんのための、と聞きかけてやめた。

問題はそこではない。

背もたれのある椅子に腰掛け、優雅に足を組んだ雲風は、まじまじと羅利の顔を見ている……気がする。面を被っているの、視線も表情も読めない。

値が張るであろう黒檀の椅子と机、螺鈿で花鳥の描かれた漆の家具。見る限り部屋にある調度品は高級品ばかり。それなりの名家の人間であることは間違いない。

しかしここはどこだろう。ずいぶんと移動した気がする。皇城内の建物、あるいは宮城、はたまた皇城近くの屋敷か。

「お前、生まれは。家族はどこに住んでいる」

部屋を観察している最中。ぶつけられた意外な質問に、羅利は目を瞬かせる。

「生まれ、ですか？ わかりません」

「とぼけるな、正直に答えろ」

生まれがよければ解放されるのだろうか。だが身元をこれ以上偽っても、心証がよくなるとは思えない。女で官吏の服を着ているという時点で、すでに大問題なのだ。ここは素直に話すが吉だと、羅利は判断した。

「記憶をなくして森を彷徨っていると、紙屋の主人に拾われたのです。故郷のことは本当にわかりません」

「本当か？」

「この状況で嘘はつきませんよ」

ひりつくような緊張感が部屋に満ちる。

だがそれはすぐに緩み、雲風はがっくりと肩を落とした。  
 「そうか、それは……災難だったな」

——おや？

同情的な返答に首を傾げる。張り子の熊猫は見るからに萎れ、二人しかない部屋に、今度は気まずい沈黙が流れた。それを聞くためにここに連れてこられたのだろうか。

「……あの、貴方様はどなたなのでしょうか」

たまらずに切り出せば、ぴくり、と雲風の肩がはねた。

「その、大変美しい胡服をお召しですし。尊き御身の方とお見受けしますが。不勉強なため、お名前を存じ上げず……」

「そうか、変装したつもりだったのだが。この胡服はそこまで高価なものだったのか……」

「いや変装つて。服が高価とかそれ以前の問題……」

「なんだと？」

「いえ、すみません。どうか気にしないでください」

——どこのおとぼけ坊ちゃんだこの人は。これが変装だって？

「で、どなたなのでしょうか」

「俺は……えー……」

「またも妙な間がある。立派な服を着ていても、中身はボンクラなのだろうか。」

「皇帝の食客だ」

「今、変な間がありましたよね。明らかにとってつけた設定ですね？」

見える。熊猫面の下で冷や汗をかいている様が見えないはずなのにありありと見える。

「こ、皇帝の食客というのは本当だ。見る、これを」

雲風は大帯から下げた佩玉を取り外し、羅刹の眼前に突き出す。

使われている飾り紐は金色。皇帝にしか許されない禁色だ。

——この色の紐を使った佩玉を帯びていることは、少なくとも皇帝に近い人物であるというの嘘ではない……。

それでもなければ禁色を使用した佩玉など、下げて歩いているだけで死罪である。

皇城内を歩いても捕縛されていないところを見るに、この佩玉にふさわしい身分の間ではあるのだろうか。

羅刹はふう、と息をつく。

まあいい。この怪しげな男が誰だろうとどうでもいい。  
羅利が知りたいのはひとつだけ。このまま女であることを黙っていてももらえるか  
かだ。

覚悟を決め、雲風の面を見上げる。

「僕は柳羅利。お察しの通り、性別を偽りました」

「む……」

「それには深いわけがあります」

相手の表情が読めない以上、下手な嘘は禁物。ここは正々堂々はつきりと自分の思  
いを伝え、情に訴えよう。

「通史編纂事業と聞いて、科挙に挑戦せずにはいられなかったんです」

「……は？」

意味がわからない、という反応をされて羅利の語りに思わず力が入る。

「だって、通史編纂事業ですよ？ この国を作った人々の躍動を、この手で後世に伝  
えられる仕事です！ それにこの巨大な禹国を築き上げた人々の軌跡を、この手で調  
べ尽くすことができます！ もう好きなことに没<sup>つ</sup>かり放題じゃないですか！ 時間使い  
放題じゃないですか！ しかもお給金もたんまりもらえる。好きな史書も買い放題な

わけですよ！」

羅利は立ち上がり、身振り手振りを交えて歴史への情熱を語ると、ぐっと両手の拳  
を握り締め、熊猫に迫る。

「それに、志願して通史編纂に関わるような人間は、歴史オタクに違いありません！  
同じ趣味を持つ仲間と交友を深め、歴史について語り尽くす……控えめに言って最高  
じゃないですか？ 紙屋の下働きの娘たちなんか、好きな男の話ばかりですよ。僕  
の歴史話になんか付き合ってくれなかった！ それがもう、議論し放題！ だからど  
うしても史官になりました！ それに史官になったら——」

「もういい！ もうわかった！」

「まだ語り終わってません！」

「俺はもういい！」

すごくノって来たところだったのに、と頬を膨らし不満顔をする。だが、ドン引き  
する熊猫仮面を見て冷静になった。この男に引かれるのはちょっと心外である。

「お、お前の熱い思いはよくわかった。女であることは黙っておいてやる。他言しな  
いと誓おう」

「あ……ありがとうございます！ このご恩は一生忘れません！」

通じた。やはり大事なものは心。最後の砦はオタ心なのだ。

「だが、条件がある」

「はい、なんなりと！」

雲風は自分の向かいの椅子を指差した。座れ、ということらしい。

「お前に、悪霊祓いを頼みたい」

椅子を引き、座ろうとしていた羅刹は動きを止める。

「あくりよう、ばらい……?」

「そうだ」

「僕は祓い屋ではないのですが」

「わかっている。正しくは、本当に悪霊がいるのか調べてもらいたい」

羅刹はあんぐりと口を開け、意味がわからないという顔をした。

初対面の下っ端官吏に、なぜそんなことを頼むのか。怪しさ満点ではあったが、今

それを口にしてこの男の気が変わってはたまらないと、羅刹は口を噤む。

「後宮内での悪霊の噂は知っているか？」

「いえ、後宮のことは何も」

「そうか。まあ、箝口令が敷かれているようだからな」

雲風はそう言うと、深いため息をつき両手を組んだ。

「皇帝の寵妃が、次々と変死を遂げている。そして揃いも揃って、死の間際まで『妃の幽霊』に怯えていたという」

黒檀の椅子によく腰を落ち着けた羅刹は、両腕を組む。

後宮の悪霊。ありがちな話だ。

国中の絶世の美女を集めた後宮には、二千を超える女たちがいると聞く。華やかな一方で皇帝というたつたひとりの男を奪い合う地獄の花園でもあり、足の引つ張り合いは日常茶飯事。そして女同士の争いを生き残ったとしても、寵妃として愛でられるのはほんのひと握り。一度お渡りがあったとしても、それきりということもある。そんな愛憎渦巻く閉鎖環境であれば、悪霊だの鬼だのという存在が、まことしやかに語られるのも頷ける。

—— だけど。悪霊なんでもものは存在しない。だって僕は見たことがないもの。

羅刹は死んだ人間が化けて出るなどという話は信じていない。人を祟る悪霊、伝説上の生き物、特定の場所で語られる禁忌。これらのものには存在すると信じられるにいたった理由がある。羅刹が歴史に面白みを抱くのは、こうした「不思議なもの」の真実を知ることができるからという理由もあった。

——一見悪霊の仕業としか思えない変死だったとしても、絶対にカラクリがあるはずだ。

「ご依頼内容、理解いたしました。謹んでお受けいたします」

拱手をし、頭を下げる。そして、雲嵐に見えないようにほくそ笑んだ。

悪霊退治に興味はないが、調査の過程で貴重な記録に触れる機会を得られるかもしれない。まったく旨味のない話でもないと思った。

「ではこれから、よろしく頼む」

史官になった暁にはこの調査の経験も活かせるだろう。情報と人脈というのはあればあるほどいい。普段関わることでできないものであればなおさら。

羅刹はそう自分を納得させ、面倒仕事を引き受けたのだった。

## 二、後宮の悪霊

「おばちゃん、包子二つちようだい」

「はいよ！ あらあんた、細っこいわねえ。もっと食べなさい。官吏は大変な仕事なんだから、食べないともたないよ！」

「胃が大きくできてないんで入らないですよ」

官吏のために用意された食堂では、安い価格で温かい飯が食べられる。科挙を通して優秀な者を集めても、待遇が悪ければ人材は逃げていく。継続的な官吏制度見直しの過程で、多忙で体調を崩しがちな官吏の健康促進のために食堂も用意されたらしい。厨の調理人から蒸籠を受け取り、空いている卓につく。蓋を開ければ、湯気のためにつつくらとした白い包子がお目見えする。熱々の皮で火傷しないように気をつけながら、一つを手を取った。

——まずは亡くなった妃たちの侍女頭に会わせるって言ってたっけ。半分に割った包子の片方に齧りつきながら、羅刹は雲嵐の言葉を思い出す。

亡くなったのは皇帝の寵を得た者ばかり。幽霊を見るようになった妃は、夜中の立ち歩き、壁に向かつてのひとりごとなど、不可解な行動が増えていったという。そのうち水も食事も喉を通らなくなり、最後には儂はかなくなってしまったのだそう。

それを怖がってか、後宮の妃嬪ひひんは皆、自主的に地味な服装をし、皇帝の目に触れることを避けるようになったらしい。本来なら出世のため、皇家と縁を結びたいはずの名家の当主たちでさえも、娘を後宮に差し出すのを渋っているという。

現在の皇帝には十八歳の東宮がひとり。だがこの東宮はとんだ放蕩息子ほうとうしで、女遊びに忙しく、ろくに公務にも顔を出さないそう。東宮以外には幼い姫しかおらず、皇子はいない。この状況であれば、後継者候補としてもう一人二人男が欲しいはず。悪霊妃事件の風評被害は痛いだろう。

——それで怪しげな食客が動いている、と。正式に官吏を使って調査をすれば、悪霊話の信憑性しんぽうせいが増してしまうものね。万が一正体がわからなかったら、状況をさらに悪くしてしまうだろうし。

羅刹は熊猫の面を思い出し、眉間に皺を寄せた。そうとは言っても、調査を監督する候補に、もうちょっとマシな人物はいなかったのだろうか。

しかも彼は初対面の羅刹に調査を丸投げしている。いくら状元及第とはいえ、新人官吏の自分に依頼するなど、頭がおかしいとしか思えない。弱みを握ってこき使うと言っても、もっと実務経験豊富な人間を使うべきなのでは。

——まあ、男女両方の視点からこの事件を調査できるという点では、適任なのかもしれないけどさ。

食事を終え、仕事の開始前まで史書でも読みに行こうかと食堂から外へ出たところあたりが突然騒がしくなった。

「皇帝陛下だ」

誰かがそう言ったのを合図にして、次々とその場にいた官が拱手の姿勢をとる。周りがそうしたのに習って、羅刹も拳を合わせ、頭を下げた。

禹国の現皇帝・蒼徳そうとく。東宮時代は民の声によく耳を傾ける利発な人物として期待が高かったらしいが。

——進士式の時は気がつかなかったけど……ずいぶんとやつれているな。

かつて鷹たかのようだともてはやされていたという鋭い眼光は鳴りを潜め、目元は落ち窪くぼんでいた。疲労の色が強く、顔色も悪い。

「蔡華様もご一緒だ」

近くにいた官吏の言葉につられ、皇帝のうしろを行く人物に視線を移した羅刹は、

思わず感嘆の息を漏らした。

禹国では珍しい錦色の豊かな髪に空色の瞳。肌は白磁器のように白く、傾国の美女が存在するならこういう人だろうと思わせるほどの美しさだ。

——西方の人間にああした容姿の人間はいると本で読んだけど、実物は初めて見た。

「はあ、あれで宦官つていうのが勿体ないよな」

「あれだけの美貌だ。俺は宦官でもいい」

「下手な女をもらうより、蔡華様を嫁にもらいたいよ、俺は」

周囲の下世話な会話により、羅利は彼の正体を知った。宦官。後宮で仕えるため、自らの意思で男である証を切り落とすか、罪を犯して宮刑となった者だ。

皇帝の側仕えをするほどだから、志願して宦官になったのだろうか。しかし西方の人間で宦官になったものなど聞いたことがない。金の髪に白い肌を持つ人間は社会的身分の高いと聞く。宦官になど自らなるだろうか。

——そういえば、どこかの家が西方の女性を娶ったという話を聞いた気が。

その類の噂話であれば、老師経由で聞いたのだろう。

——まあ、あの人の話は眉唾なものも多いし、本当かどうかはわからないのだけど。しかし、誰だったかな。

「羅利」

「うわあっ！」

突如背後から声をかけられ、羅利は飛び上がる。

「なんだ、うわあとは」

「びっくりするじゃないですか。しかもあなたの場合、熊面……」

振り返ってみて一瞬息が止まった。不気味な笑顔の女の大頭面の顔がそこにあったからだ。

「なんですかそれは」

「今日は後宮に行くのでな」

——答えになってない。

よく見れば、服も深い緑色の女官服を着ている。だが彼の場合、肩幅が大きく、上背もあるため、どこからどう見ても女には見えない。人を喰らう大頭面の化け物と言われた方がしっくりくる。

「変装というなら他にあるでしょうに。それだったら顔を出して化粧をした方がマシです」

「……陽に当たると溶けてしまうのでな」

「その下手な言い訳もやめてください」

「お前にも着替えてもらう必要がある、こっちへ来い」

雲風は羅利の手首を掴むと、後宮のある内朝の方向へと歩き出した。

「待つてください。まだ仕事が」

「吏部尚書しよしよには許可をとってある。午後いっぱいお前を借りると」

「勝手にそんなことしないでください！ 僕の評価に響く、じゃないですか。僕が史官になれなくなったら責任を取ってくださいるんですか？」

「そんなに史官になりたいか」

「当たり前です！ そのためにここへきたんですから」

羅利の手首を掴む手に力が入る。雲風は立ち止まると振り向き、向かい合う形になった。

「偽りの記録を書かされるとしてもか？」

「偽りの記録ですって？」

彼の発した言葉に羅利は反感を覚えた。

「御史台の史官は、その筆によって正義を貫く者です」

思わず声が入る。夢を貶けなされたようで気分が悪い。

「二十年ほど前、中書令ちゆうしゆれいが後宮女官を手籠てこめにし、被害者の女官が自殺するという事件が起きました。史官はその事実を記録したため、中書令の指示で殺害され、記録は燃やされました」

雲風は応答しない。ただ、動かないところを見ると聞いてはいるようだ。

「すると殺害された史官の同僚が、死した仲間の遺志を継ぎ、再度その事件の記録を書いたのです。激怒した中書令は、この史官も殺しました。しかも今度は見せしめとして、史官を全員集め、その目前で処刑したのです。それでも史官たちは諦めず、殺されても、殺されても、中書令の卑劣な犯行の記録を残し続けたのです。そうして彼らが信念を貫き通した結果、中書令は罰を受けました」

「狂っているな」

「それが史官の正義です。彼らの使命は、正確な記録を残すことにより、権力が正しく行使されるよう監視することなのです」

「お前はそんな話をどこから聞いた」

「故郷にいる老師が教えてくれました。歴史を個人的に研究している方で、宮仕えの経験もおありです」

「そうか。お前の師は、きっといい時代に宮仕えをしていたのだろう。ひとつ忠告を

しておいてやる。その老師とやらが仕えていた時代の史官と、今の史官が同じ正義を貫いていると思わぬ方がいいぞ」

それだけ言うと言風は羅刹に背を向けて、羅刹を引つ張るようにして先を歩いていく。

「ちよつ、引つ張らないでくださいってば。今のはどういう……」

「そんなに熱望しているなら、史官に確実に配属されるよう俺が手を回してやる」

なんでもないことのように雲風の口から出たその言葉に、全身に稲妻が走るような衝撃を受け、羅刹はその場に立ち尽くす。

「ほ、ほ、ほ、本当ですか」

体がブルブルと震え、思うように声が出てこない。

「今回の悪霊騒ぎを解決したらだかな」

こんなにもあつさり言つてのけるとは。彼が皇帝の食客というのは本当なのかもしれない。

「ありがとうございますー！ いやっしやああ！ やつたるぞおー」

上司の推薦を得られれば史官への道は開けるが、確固たるものではない。志望者が多ければふるい落とされるし、そもそも推薦をもらえる保証はないのだ。そのあたり

は人脈を作りつつ、小細工が必要になるかもしれないと思つていたのだが。

皇帝の食客が手を回してくれるなら、これほどありがたいことはない。

「さあ、早く後宮に参りましょう雲風様！」

「……様はやめろ。お前にそう呼ばれると気色が悪い」

小躍りしながらついてくる羅刹を見て、雲風は薄くため息を吐いていた。

## 三、後宮の悪霊妃

夷国の後宮に住まう妃たちには位がある。その頂点に位置するのが皇后であり、貴妃、淑妃、徳妃、賢妃と呼ばれる四夫人、さらにその下に中級妃、下級妃がいる。

「侍女などの側仕えも含め、後宮だけで二千人。数字では知っていましたが、こう目の前で見ると圧巻ですねえ」

後宮の入り口を守る天龍門を越え、忙しく働く下女や女官、妃の侍女たちが行き交う広大な前庭を見て感嘆する。

「ところであの」

「なんだ」

「やはりあの、もうちょつとマシな変装はなかったのでしょうか」

「完璧な変装だろうが。これならば男であることはばれない。佩玉があれば通行にも問題がない」

「せめてあの、僕のように宦官の格好とか」

薄鼠色の宦官服を着た羅刹の存在感など、もはやないに等しい。大頭面と目が合っ  
てしまった不幸な女官や下女の悲鳴が、あちこちから聞こえてきているのだが、この  
男の耳には入っていないのだろうか。

「女の面で服が宦官ではおかしかろう」

「……なんで女の面を被ってきちゃったかなあ」

「さあ、ついたぞ」

くだらぬやり取りをしているうち、目的地の建物の前に辿り着いていたようだ。

「……ここが」

「先日亡くなった貴妃、芙蓉妃が住んでいた紫水宮だ」

黄みがかった朱に塗られた柱に、銀黒の瓦屋根。要所要所に蓮をかたどった彫刻が  
ほどこされている。皇后のすぐ下の位である四夫人の住まいということもあり、紫水  
宮の作りは豪華だ。入り口の門を抜け、近くにいた侍女に用件を伝えれば、宮の中か  
ら三十路前後と思われる侍女が出てきた。

「お待ちして……」

薄桃色の襦に紅色の裙を合わせた侍女は、羅刹の背後にいる雲風を見て表情を凍ら  
せた。

「お時間をいただきありがとうございます。宦官の周羽しゅううです。こちらは雲母きんぼ。顔面に酷ひどい火傷を負っているため、面を被おつております」

愛想のいい笑みを浮かべながら、羅刹はすかさずそう紹介した。この面への違和感を残したまま本題へは入りづらい。即興で考えついた言い訳だが侍女は納得したらしい。

「そうでしたか。それはお可哀想に」

心底同情している様子の彼女に申し訳なく思う。

「書記としては優秀なので、記録係として連れて参りました」

雲嵐が隣で拱手をする。間近で見るとより体格のよさを実感した。本当に女装が似合わない。

「私は紫水宮で芙蓉様の侍女頭をしておりました、明凜めいりんと申します。どうぞお上がりください」

明凜に伴われ、羅刹と雲嵐は紫水宮の中へと足を踏み入れる。宮の中は綺麗きれいに掃き清められ、隅から隅までよく磨かれているが、飾り物の類が一切なく華やかさが無い。「ずいぶんとすっきりされていますね」

「紫水宮の主人である芙蓉様が亡くなられましたから。次の貴妃様を迎えるための準備

をしております。あと数日で片づけは終わるかと」

芙蓉様がおられたときは、宮のあちこちに新鮮な花が生けられていたのですよ、と、悲しげに微笑ほほえむ明凜のまなじりから、涙が一筋落ちた。申し訳ございません、と言いながらも溢れる涙は止められず、彼女は嗚咽を漏らす。

「大丈夫ですか。お話は少し休まれてからでも」

「いえ、とんでもございません。お忙しいかと思しますので」

明凜は涙を指先で拭うと、芙蓉妃の思い出話を始めた。彼女がこの宮にやってきたのは十七の時。父親が宰相ということ、はじめから上級妃として後宮入りしたそ  
うだ。

芙蓉妃が使っていたという客間に案内され、椅子に座る。明凜と同じ襦裙を来た侍女が、茶を運んでやってきた。上級妃付きの侍女は、妃の使う色に合わせた揃いの襦裙を着るものらしい。

「悪霊に取り憑つかれたという噂をお聞きましたか」

羅刹が発した、悪霊、という言葉に反応し、明凜の表情が目に見えてこわばる。顔を蒼白に変えた彼女は、震える両手を胸の前で揉もみ合わせた。

「何度か陛下のお渡りがあったあとです。妃の幽霊が視みえると仰おしえられるようになって

たのは」

明凜の話をまとめるとこうだ。

芙蓉妃が眠りに落ちかけた時、ふと目をやると、下ろし髪を風に揺らす妃嬪が窓辺に腰掛けていた。外には見張りの衛士えいしがおり、入り口も同様。それを掻い潜るには骨が折れるし、仮に侵入できたとしても、まだ起きている侍女たちがすぐさま気がつくはず。

おかしいと思いを上げようとしたが、体が硬直していて動かない。その間も妃嬪はゆらゆらと衣を揺らしている。窓は開いておらず、風も吹いていないというのに。芙蓉妃は妖しげな妃嬪の顔を見ようとした。だが髪が顔に垂れているせいで造作は見えない。ようやく体が動いたところで、なんとか部屋から這い出し人を呼んだという。だが、侍女が部屋に入るときには妃嬪の姿は跡形もなく消えていた。

「悪い夢を見られたのでしょうか、とお慰めしていただきましたが」

しかし陛下のお渡りが重なれば重なるほど、芙蓉妃は夜うなされるようになった。「またあの女が来る、私を殺しにやってくるの。芙蓉様はそう訴えておられました。奇行も目立つようになったせいか、陛下の足も遠のきまして……すると気を落とされたのか、たちまち体調を崩され、お亡くなり……」

「その幽霊に何か危害を加えられたのですか」

「いえ……芙蓉様の方をじっと見つめていただけのようでしたが」

明凜は両手で自分の体を抱え込むようにする。

「近づいてくるのだそうです」

「近づいてくる？」

「はい。初めは窓際に腰掛けていたのに、次に見た時には椅子に座っていたと。そして次に現れた時は——」

薄い唇を震わせ、明凜がやっとの思いで口にする。

「血走った眼まなこを開いて、褥とねに横たわる芙蓉様の瞳を覗き込んでいたのだそうです」

ぞわり、と背中を冷たいものが走る。

幽霊など存在するはずがない。そう思っている、こちらを覗き込む異様な女を想像すると恐ろしい。

「紫水宮で芙蓉妃の他に幽霊の姿を見た方は」

「おりません」

「では、具体的な姿形は誰もわからないのですね」

「はい。芙蓉様の訴えについては形史かたしが記録をしているはずなので、そちらを見れば

より正確な情報がわかるかもしれません」

紙の上を筆が滑る音がする。雲風は事前の打ち合わせ通り、ちゃんと会話を書きつけてくれているようだ。気が散りそうなので書いているところは見ないでおくが。

「それで、だんだんと衰弱されていったと」

「はい。食事も受けつけなくなり、昼でも夢を見ておられるようでした。話しかけても呼びかけに答えず、どこを見ていらっしやるのかわからないというような様子で。前触れもなく泣き出したり暴れられたり、舞を舞ったりと……とにかく普段の芙蓉様からは考えられない行動をとられて」

羅刹は腕を組む。明凜の話だけ聞けば、悪霊に呪い殺されたという噂が立つのもわかる。

「毒の可能性は？」

「ありえません。食事は毒味がすべて確認していましたし。もし飲み物や食事に何か混入されていたのであれば、毒味がまず不調を訴えるはずですから」

「そのほかに、気になる点はありませんか」

「そうですね……」

明凜は何か言いたいことがある様子だが、口にするのをためらっているようだ。

「少しでも気になることがあれば仰ってください。お話いただいた内容を外に漏らすことはありませんので」

「あの、私ではなく、芙蓉妃が仰っていたことなのですが……」

羅刹は明凜の言葉に反応する。

「徳妃は死者を操る力があるのだと……」

「死者？」

「いえ、あの、やはり気を病まれてからのお言葉ですから、きつと夢と現の境がわからなくなっていたのでしょうか。実際、以前の調査の際もお話しましたが、馬鹿馬鹿しいと一蹴いっしょくされておりますし」

この言い方は、彼女も徳妃の噂を流していたのではないだろうか。

口数が多くなつたところを見るに、あくまで自分は関係ないと主張しておきたいのだろう。侍女が他の妃嬪の印象を下げる言葉を発していたとあれば、大問題である。

「続けてください。以前の調査では暴けなかったことを暴くために、僕はここにおりますので」

鼻を赤くし、ありがとうございます、と明凜は頭を下げる。

「現在の徳妃、鏡花様は、元々力のある巫女らしいのです。後宮に入られてからも怪

## 立ち読みサンプル はここまで